
中立国家の私

A R I K A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中立国家の私

【Nコード】

N4222A

【作者名】

ARIKA

【あらすじ】

生きる意味は？生きる価値は？友達って？イジメと隣り合わせに生きる現代の中学生を描写した小説です。

胸の穴（上）

今思うとなんでもと早くこうしなかったのかと夕暮れに赤く染まる街を見下ろしながらちよっぴり後悔している反面、ここまで歩いて来れたことと、遙か遠くに感じていた目的地が目の前まで近づいていることに驚いた。この先はこんなことになったことに両手一杯分位の人間が驚き、コップ一杯程度の後悔が私を苛むのだろう・
・ たった一杯分。

「じゃ。また明日」耳の奥をチクチクといやらしく突付くこえが聞こえた。と、同時にオートロック式のドアが開き・・・・閉まった。

そろそろ時間だ・・・・私はカーボンの手すりに手を強く押し付けた。

いつもと同じきつかり七時十五分に目が醒めた。私の体内の時計は正確で毎朝この時間に目覚まし無しで起きることができる。

ベットの横にある小窓のカーテンを開けると心地良い太陽の光が部屋を満たした。ベットの上で「うん・・・・」と伸びをする。これ一つではつちり目が醒める。ベットから這いて、スリッパを履き部屋から出る。

キッチンに行くといつも通り父が私より先に起きていた。

「おはよ」私が父に声をかけるとやっと気がついたらしく「おつ。おはよう」っと元気に返して来た。

「まってる、今パン焼くから」

うん。と半端な返事をして私はテレビをつけた。朝のニュースを見る、七時五十分頃にやる血液型占いが本当の目的だがぼんやりとほかの時事情報もチェックする。

「へ」。離婚か「テレビを見ながらぼんやり呟いた「あれ。こ

の人三ヶ月位前に結婚したばかりじゃなかったわけ？」「お皿に目玉焼きとソーセージ、パンを乗せた皿を二つ持った父がテーブルに着き言った。

「え？そーだっけ」父から一つのお皿を受け取りながら私は聞いた。

「もう駄目だな。年だから最近の芸能人の顔がみんな同じに見えるよ」小首を傾げながら言った。

「まだ、四十そこいらの人間がなに言ってるの。あつ！」話しながら卵に箸をつけると、白い卵白の周りがたちまち黄色く染まった。「ちよつとー！これ半熟じゃん」眉間にこれでもか、と言うほど皺を寄せて言っていると、父が覗き込んできた「あ。ほんとだ。こっちの方が固焼きだったのか」と自分のお皿を箸で指しながら言った。

「もー最悪」

私は昔から半熟の目玉焼きが大嫌いなのだ。でろでろしてて、喉に入れたら水分を奪われるし、全然食べた気にならないし、何よりもお皿が汚れ、周りの食べ物まで黄色く染まるのがどうにも耐えられなかった。

「年だからな・・・」年のせいにして逃げようとした父を睨み「まだ四十そこそこでしょ」つと一喝した。

「まあ、まあ、いいじゃないか残せば。おー、またイジメか」テレビに向かって箸を振りながら無理やり話を逸らした。

「えー。イジメ位で自殺しちゃうのまたしても眉間に皺を寄せながら言うとお前もイジメにあつたら、ちゃんと相談しろよ」と父が言った。

「ご心配なく。あつたとしても、自殺なんかしませんから」そう言いながらソーセージにかぶりつく。

「それに・・・」ソーセージを噛みながら付け加えた「お父さん一人にしたら危なそうだもん」

「あらま、^{じや}ちゃんは優しいな」

おどけながら言った父の言葉は本心だったのかどうかは知らない

が、ちよつと照れくさくなった。

私の家には母は居ない。死んだのだ。死んだと言っても本当に死んだわけではない。母はだらしない人間で、父と二人で貯金していたお金をすっからかんにしてしまったのだ。そして、それに父が激怒して離婚してしまったのは言うまでもない。それ以来母には会っていない。私的には、死んだ人間も、もう逢う事がなくなった人間もそれほど変わりはないと思っている。それ以来家事は大抵二人で折半している。

「洗濯物。タイマーで栞が帰ってくる頃に終わるように設定したからあとは頼んだぞ」

血液型占いに夢中になっている私の背中にむかって言ってきた。

「はいはい」っと、形だけの返事をした。

「じゃ、お父さん行くからね。戸締りと、洗濯物頼んだぞ」

「はいはい。いつてらっしゃい」

今日はO型は三位だった。人との約束を忘れてしまわないように注意！それさえ守れば今日一日ハッピー。ラッキーカラーはピンク。こんな具合だったので洗濯物のことを忘れないか心配になった・・・

胸の穴（上）（後書き）

はじめまして。これから頑張っ て書きますのでよろしくお願いしま
す。

辛口な感想をちしてます。

文体、言葉回し、表現法、 への批判。 中傷なんでもOK。

胸の穴（下）

ガチャリつと、家の鍵を閉めて、鍵をポケットにしまった。私が住むマンションは十六階建てで、このマンションを建てる時には日照問題のことなどで近隣住民からは少々反感を買った。そこら辺の壁に「近隣住民から光を奪うな！」とお決まりの文句が書かれた張り紙が貼

られていた。そのマンションの三階に私の家はある。だから下までは階段で行き、外に出る。しかも、徒歩一分もかからずに学校へ着いてしまうというなんとも学生にはラッキーな場所に佇んでいる。このマンションが市民の反対にも耐えて、建ってくれたことに心底感謝している。一個下の階には同じ学年の洋子が住んでいる。初めてのうちは家を出る時間が一緒だったのでバツタリ会ってそこまでの距離だがなんとなく流れで一緒に学校に行っていたが、徐々に一緒に行くのが暗黙のルールと化していった。私が遅刻ギリギリの時間に家を出た日も一階のところで待っていてくれた。

この日はちよつと家を出るのが遅くなってしまったので二階のところで洋子に会わなかった。二階から一階に降りる。そこには洋子がいなかった。少し不思議に思ったが風邪か、痺れを切らして先に行ってしまったのだらうと思った。

オートロックのドアを開き外に出る。もう、春というよりは夏の匂いを含み始めた太陽の心地の良い日差しが体を包む。もう夏か・・・なんて感慨に浸ってる私に容赦なく鞭が入った。学校から予鈴の音が響いてきたので、ヤバイと思って走り出した。

私の学校には昇降口が三つある。一番正門に遠い一番奥の昇降口に三年生の下駄箱がある。真ん中の昇降口は裏門にも繋がっている来賓用の下駄箱がある。そして、一番正門に近い昇降口が一年生と二年生の下駄箱がある。そのの二年生の下駄箱にある私の上履きを取り出し手早く履き替え、靴を下駄箱に入れる。ここからが大変

だ。一階には教員室、二階には三年生一年生の教室がある。そして私の二年生の教室は三階と、考えただけでため息が出そうな位置にある。一段飛ばしで、時には二段飛ばしで階段を駆け上がる。しかし、これだけではない、私の二年A組は長い廊下の一番奥に位置してるのでさらにそこから走らなくてはならない。これだけで凄く体力が付きそうだ。

つと、走ってる途中でC組に入ってく洋子が見えた。

「洋子おはよ」つと走りながら声をかけた。

洋子が振り向く。つと、私の顔を見た途端に表情に雲がかかり、そのままうんとも寸とも返事もせずに教室の中に入ってしまった。気が付くと私は立ち止まっていた。は？と思いながら数秒間唖然としていたが、本鈴が鳴り、担任の前島が私の教室から体半分出して「真鍋。早く入れ」つと言ったのですぐに我に返った。ヤバイ！と思いまた走り出した。は？と思いつつもはつきりと自分の胸にポツカリと穴が開いた感覚を覚えた。

息を切らしながら自分の席に崩れるように座った。

「乗来るの遅いよ、こんなに家近いのに」つと、前の席の志保が声をかけてきた。

「志保が早すぎるんだよ、こんだけ家近いんだからもつとのんびり来ればいいのに」

私のマンションには、けっこう同じ学校の人間が住んでいて、志保もその一人だ。しかし私とは違い、予鈴の十分前には登校している。

「ギリギリで来るとエレベーター乗れなくなっちゃうんだもん」

「あー。だよ。私なんか三階だから階段でひょいっとこれちゃうもん、だから気が緩んで家出るの遅くなっちゃうんだよね、ちゃんと朝は起きれるんだけど」

志保の家は十六階建てマンションの十六階で、景色が最高だ。しかし、同じ学校の人間が多く住んでいるので朝はエレベーターの取り合いになるので、早めに家を出ないとエレベーターを何分も待つ

ことになる。階段で行くにしても十六階から一階まで降りるのは朝の寝ばけた体ではつらいものがある。

「あ。やば、数学の宿題やり忘れた」頭の中でぼんやりと今日の時間割りを思い浮かべていたら思い出した。

「あ、私の写させてあげようか」

「ほんと。サンキュ」と言いながらかばんの中から真っ白な宿題プリントを出した。

私は自分でも自覚してるほど八方美人だ。良い意味ではなく悪い意味で、そして二枚舌でもあると思う。ある子が他の子の悪口を言っていたらそれに乗っかり、そのある子に悪く言われた子を褒める子がいたらそれに乗っかり、誰のつまらない話でも愛想笑を返す。良く言えば風当たりが良いのだろうが、私はこんな私を好きにはなれない。でも、私は私と決別はできない関係にあるから私は私であり続けることしかできない。こんなことを考えると毎回荒野の真ん中にポツリと置かれてどうにもできない気分になる。くつつくこともできず、離れることもできずただ中間でポツリと立つことしかできない。

四時間目の理科の時間に、意を決して洋子に会いに行こうと思った。聞きたいことは沢山あった。今日なんで先に来てたのか。一緒に学校に行くのはお仕舞いにするのか。なんで私を無視したのか。世の中には知らないほうが良かったものが沢山あるが、このことはどうしても知っておきたかった。

チャイムが鳴り、起立、礼をして授業が終わる。理科は基本的に二階の理科室で授業が行われるので大抵はチャイムの前に授業をお仕舞いにするのだが、今日は実験だったので少し遅くなった。三階の教室に帰るまでにそのことについて二人で少し愚痴った。

三年生の廊下を歩く頃には話題は昨日のドラマの話に変わっていた。ふと前を見ると洋子がミカと二人で歩いてくるのが見えた。まだ洋子は私に気がついていない。心臓がキュッと閉められる感覚を

感じた。徐々に洋子達との距離が近づき、すれ違う間近で洋子と目が合った。

が、すぐに逸らされた。今朝開いた胸の穴が少し大きくなるのを感じた。追いかけて詰問しようかとも思ったがやめた。志保の前でそんなことをしたくないし、喧嘩中（と、言っても一方的に嫌悪されてしまったみたいだけど）であることを感付かれるのが嫌だった。

「私、洋子苦手なんだよね」

気まずそうにポツリと志保が言った。

「なんで」意識した気はないが自然と声を張ってしまった。

「なんかさ、一年生の時にはあんなじゃなかったのにさ、二年生に上がってからはいじけた感じじゃん。最近良い噂聞かないし、女子の間の番長って感じが嫌だ」

「あゝ。まあ、志保はちよつとそり合わないかもね。ちよつと自己主張すぎる感じあるもんね洋子は」

「ってか」志保は私の耳元に口を近づけ「自己ちゅー」っと囁いた。

「たしかに」思わず笑ってしまった。

「私がこんな風に思ってること内緒だよ」そう言って志保は笑った。

給食の時間も、五時間目も六時間目も記憶の中を探検したが望んでいた宝を見つけることはできなかった。私は洋子になにをしたのか？なぜ嫌われたのか？似たような質問がさつきからずつと頭の中で右往左往している。

六時間目が終わり、帰りのホームルームまでの休み時間にトイレに行き、かえってきて教科書をカバンに詰めているときに手紙に気がついた。ラブレターなんかではない。女子特有の手紙の折り方だった。

その手紙を机の下で誰にも見られないように静かに開いた。きつと、深いところにいる私は大方の予想をつけていたのだろう。そして、

その予想していたことがかいてあった。再び私は静かに手紙をたたみ、ポケットの中にしまった。

胸にぽっかり開いた穴は面積を増し、その穴を冷たい風が吹き抜ける感覚をはつきりと感じた。そして、私は荒野の真ん中に立っていた。

私の場所（上）

からっぽの脳で家までフラフラ歩いた。と言ってもほんの数分の距離なのだが。オートロックのドアを鍵で開け、珍しくエレベーターで三階に昇ることにした。ボタンを押しエレベーターを呼んで、一階にエレベーターが来るまでの時間が私は嫌いだ。この空白の時間が無性にもつたいない気がする。数分待ってやっと来たエレベーターに乗り「3」のボタンを押した。三階まで昇るのはあつという間だった。エレベーターを待つ時間などを差し引きするとやつぱり階段の方が早いなと思ったが、階段を上っている途中で洋子に出会うのは避けたかった。

家の冷たい玄関のドアの鍵を差込み、捻る。ドアを開けて空っぽの家に「ただいま」と呟く。返事はかえってこないのを知りながら毎度やってしまう。自分の部屋に入りカバンをその辺に放り、ベツトの上に崩れ落ちる。ポケットを探り、今さっきの手紙を取り出した。

ベツトの上に仰向けになり手紙を天井にかざし、短い文面をしつかり咀嚼^{そしゃく}するようにゆっくり読む。

「いい加減。どんな人間にも良い顔をするあなたに愛想が尽きました。しかも、他人の秘密を軽々しく話す。近い内にあなたは空気になるます。もう学校なんて来ないでね」

みぞおちの辺りが軋む。胸にポツカリ開いた穴を風がひゅうひゅう通り抜ける。また、元の通り手紙をたたみ直してポケットの中に入れた。

給食の時間からHRの時間まで記憶の中を探し回っても見つからなかった宝のありが分かった。初めから自分自身のポケットの中に自分で入れていたのだ。初めから持つてるものをいくら探しても見つかるはずがないのに私は一生懸命探していた。今朝洋子に無視されたときから感付いていたが見て見ぬ振りをしていた。いや、も

つと深く言えば洋子の秘密を橋本弓子に話したときからいつかこうなるとは思っていた。しかし、そのいつかがこんなにも早く訪れるとは。

橋本弓子とは、同じ学年の洋子と同じクラスの女子だ。陽気でおしゃべりで、物事への考えがいつだって軽々しい。そんな弓子に洋子の秘密を話してしまったことは大誤算だと、話してしまった日から思っていた。洋子の秘密とは、三ヶ月ほど付き合っている彼氏とHしたことだ。別になんてことのない話だ。人間が生きていく過程の中での絶対必要な行為。そんなちっぽけなことを橋本弓子に話しただけで洋子は私をつまはじきにしようと目論んでいるのだ。

二三日前の話になる。私は駅ビルに参考書を買いに行つて、たまたま弓子に会つた。そして、流れて一緒にマツクに言つたのだが弓子は本当に良く喋る子だった。詳しい経緯は忘れたが、何かの弾みで洋子の話になって、弓子が「なにかよーこの秘密とか棐知らないの？」

つと、聞かれたので思わず言つてしまった。「うつそ」つと赤縁の眼鏡の奥で大きく見開いていた。すぐにヤバイと判断した私は「ウソウソ。噂だからこの話しには確証はないよ」つと慌てて付け加えたのだが結果的に最悪のパターンになってしまった。大方面白半分でこの噂が本当か嘘か洋子本人に直接聞いたのだらう。本当に物の考えが軽い。

ベットから身を起こしてベットの縁に腰をかける。「なぜ？」という疑問は頭の方の隅の方にすっかり根を下ろした代わりに、「どうしよう」という戸惑いがさつきから頭の中を右往左往している。一週間もすれば今まで通りに私と接する人間は半分に減ってしまう程、洋子の勢力はデカイ。よからぬ妄想が浮かんでは弾け、浮かんでは弾けを繰り返した。終いには「トウコウキヨヒ」なんて情け無い言葉まで浮かんだ。ダメだダメだ、と頭を振つて立ち上がった。

私の場所（下）

家の鍵をかけて、階段に向かい階段を上る。四階・・・五階・・・六階・・・七階・・・八階からは壁の色がオレンジから灰色に変わる。その先も延々と階段を上り続けた。息が上がり、同じ壁、同じ階段が延々と続く為、精神的にも疲れてきた頃。ふつりと階段が切れた。はあはあと息を切らしながら廊下を歩くと、開けた庭園が目の前に現れる。このマンションには八階と十六階に子供が遊ぶように庭園が設けられている。しかし、一年ほど前に幼児の転落事故があった為、今では南京錠で入り口は硬く閉ざされている。しかし、その網のドアは中学生がよじ登れないほどではないので、中学一年生の頃にはよく悲しい気持ちになったときに来ていたのだが、一度管理人さんに見つかってこっぴどくしかられて以来ここには来ていない。期間的に言うとなん年近くになる。

金網に指を通し、数回揺らして容易には壊れないことを確認する。そして、背伸びをして高いところの網目に指を絡ませて、右足を南京錠をかけてあるところに足をかけ、一気によじ登った。ドアの向こう側には整備された芝生と木製の椅子が二つのみで、他に特に何も無い開けた空間だ。一応、という感じで、私の肩位の金網フェンスが備え付けられている。

フェンスに近寄り金網に指を絡ませる。春の匂いを含んだ風の代わりに夏の匂いを含んだ風が吹き始めても、やはりまだ夕方だと風が冷たく感じる。ここへ来るときにはエレベーターを使わないのがミソ。良い感じにつかれると妙な開放感がでてくるのだ。

赤く染まる町を見下ろしながらいろいろなことを考えた。これからのこと、いろいろな意味でだ。洋子のことに受験のこと、弓子のこと、登校拒否児になった私を父がどう思うか。もしくは私が学校でいじめられていたことを知ったときどんな顔をするか。本当にいるんなことを考えた。でも、それら全てが目の中の赤く染まる町の

中にゆっくりとゆっくりと解けて行き、そのうちに消えていった。

目をつむり、瞑想をする。実際にしたことはないし、してる人間も見たことが無いが気分だけそんな気分になる。心のドアを開け放ち全てを取り込む。不幸、悲しみ、不安、理想に現実。それら全てを集め、一つ一つ丁寧にちぎって「無」に換える。

何分経っただろうか。しばらくして目を開け、決意を固めた。明日洋子に謝ろう。こんなちっぽけな理由で友情が儼く崩れ去ってしまうなんておかしい話だ、きちんと話し合って謝れば洋子だって許してくれるはずだ。知り合っただのは中学生になってからだから、たった一年間の付き合いだが、大切な友達に違いはない。

気が付くと、もう空は夜の準備に取り掛かっていた。最後に町を見下ろして帰ろうと思い、ふと下を見ると八階の庭園にも人がいた。顔ははつきりと見えないが同じ年くらいだろう。目をしっかりと開けてみていたつもりだが、突然ふっ……と、その人は消えてしまった。その瞬間ヒューと木枯らしが吹き、背筋がぞーとなった。

なんだか怖くなったので、来たときと同じ手順でさっさとフェンスをよじ登ってエレベーターホールに駆け込んでいった。

占いの結果（上）

エレベーターの下のボタンを押してエレベーターが来るのを待つ。一番最上階ということもあって、待つかと思つたが割りと早く来た。エレベーターに乗り込み「3」のボタンを押した。ゆっくりとドアが閉まり、階数字が十七・・十六・・十五・・と下っていく。八階で止まったらなんだか気味が悪いなど、エレベーター乗り込む前から考えていたのだが、十階の辺りからエレベーターのスピードが緩くなりだしたので、まさかと思つていたら見事に八階で止まった。ゆっくりと開いたドアの向こうには誰もいない。

なんだよ、子供のいたずらか？と思ひながらすぐさま「閉」のボタンを押した。表面的には平然としていたが、内心は恐怖に震え上がっていた。再びゆっくりとドアが閉まりだしたときに突然細い指が閉まるドアを静止した。自分でもはつきりと感じるほど体が跳ね上がっていた。

「すみません」っと紫縁の眼鏡をかけた女性が指の先から現れた言葉に尖がつたものを感じたので、なんだか愛想の悪い感じの人だな。と思つていたらその女性は特に表情を変化させずに「あれ？真鍋さん」と言った。

私の名前を出した瞬間に初めて女性の顔をしっかりと見て気が付いた。同じ学年の猪俣響子だった。驚いていたので言葉が出ず、目と指で、なんとか誰だかわかったことを伝えた。

「これ、上？」と、相変わらず無愛想に尋ねてきた。

「違う。下に行く」まだドキドキしている心臓を一生懸命落ち着かせながら言った。

「あ。そう、ごめんね。間違えて上も下も押しちゃったから、どちだか分からなくて」形だけニコリと笑いながら言った。

「あゝ。分かる分かる、私も時々やつちやうよ」へらへらつと愛想笑いしながら言った「んじゃ、また明日ね」手を振りながら「閉」

のボタンを押した。でも、猪俣響子は振り返してはくれなかった。

猪俣響子は一年生の秋に転校してきた。転校生は通常話題になるのだが、特に話題にもならず学校の風景的存在へと化していった。印象的なのは紫縁の眼鏡くらいで、特に可愛いというわけでもなく特別不細工というわけでもない。転校してきた時から静かな子で、授業中、休み時間関係なく本ばかり読んでいた。しかも、分厚くて小難しそうなものばかり。いつも本にカバーを掛けているのでなにを読んでいるのかは明確には知らないのだが、雰囲気醸し出している。

そして、転校生には噂も付き物である。流れた噂は、「イジメられっこ」だった、というなんともありがちな噂だったが、何処から湧いたかも知れないその噂は、一月も経たずに消えていった。でも猪俣響子みたいのがいじめられていたと噂われるのは分からなくも無い。自分だけの殻に閉じこもり、極力人とのコミュニケーションを避けようとしている人間なのだから。

五階の辺りで再びエレベーターのスピードが緩くなりだし、三階で止まった。エレベーターから降り、我が家まで歩く。ドアの前で止まり、ポケットから鍵を出し鍵穴に差し込み、捻ったときに初めから鍵が開いていることに気が付いた。一瞬鍵を掛け忘れたかと思いい焦ったが、すぐに見当が付いた。鍵を引き抜きポケットに再びしまい、ドアを開けた。玄関には父の革靴があった。

「ただいま」と、言ったときに大事なことを思い出した。

急いで靴の脱ぎ捨て、洗面所に駆け込む。そこには既に父がいた。「おかえり。お父さんが先にやってまーす」と言いながら洗濯機の中からTシャツやら下着をバスケットに入れている。

「ごめん。すっかり忘れてた」申し訳なさそうに言うと、父はニコリと笑いながら「お父さんが一人になっちゃうよりも栞が一人になった方が危ないかもな」と言った。

「うー。返す言葉がありません」と言ったら父は笑った。

「んじゃ、ペナルティーとして今週末の掃除は栞に頼みます」

「えー。また私ー」と言いながら居間に歩いていく。

「だったらちゃんと洗濯物ほしてくれよ」

「はーい」と、形だけの返事をして、テレビをつける。

テレビには今朝やっていたイジメによる自殺事件が再び映し出されていた。そのニュースを見ていたら「人との約束を忘れてしまわないように注意！それさえ守れば今日一日ハッピー。ラッキーカラーはピンク」という、今朝の占いの言葉が浮かんだ。

占いの結果（下）

夕飯のときも、お風呂に入っているときも、今学校で話題になっているドラマを観ている時も、ベッドの中に入った後も、明日どうやって洋子に謝ろうか考えっぱなしだった。頭の中で考えて、実際に頭の中で予行練習する。今浮かんだ案もダメ。そうしたら、今頭の中に描いた映像を払い落としてまた白紙に戻す。結果的には学校で和解を求めるのは無しという考えにまとまった。言い争いになって、周りの人間に私と洋子は喧嘩中という事を知られなくなかったし、喧嘩中ということを知ったら洋子側に付く人間のほうが断然に多いはずだ。

結局長々と考えた末、結局一番初めに頭の中に浮かんだものにすることにした。考えがまとまった瞬間に私は眠りの渦に飲まれ、すぐに眠りに落ちた。

いつもと変わらない一日が回り始めた。七時十五分に起き上がり、カーテンを開ける。窓から差し込む心地良い日差しの中で、伸びをひとつ。どんなに人間関係が歪んでも、いつもと変わらない朝がやってきた。

ベッドから出て居間に行くといつもと変わらずに父がいる。

「おはよう」と、私。

「おはよう。今ご飯持つてく」と父。

今日の朝食はご飯だった。鯖のミソ煮、と言っても缶詰のものを皿に開けて温めたただだが。それとインスタントのお吸い物と白米。朝からよくやるなあ・・・と関心する。

父は学生時代に飲食店の厨房で働いていた。その為、味の事は抜きにして料理は好きなのだ。ありがちなエピソードだが、その飲食店でうちの母に出逢ったのだ。しかし、母は一週間で根を上げて「辞めます」とも言わず消えていったらしい。その後、数ヶ月ほどしたときに学校の中であたり出逢った。母は父と同じ学校の一個下

の学年の子だったらいい。そこから色々と発展して、結婚して、今に至る。少し考えればルーズな人間かどうかは分かる気がするが、気の優しい父はそこをすっかり見抜けなかったのだ。

父が両手にご飯茶碗を持って、キッチンから出てくる。一つを私に渡して、一つは、父の手元へ。

「もう夏になるな」と、父が独り言のように呟いた。

「その前に梅雨が待ってるよ。やだな」梅雨は

「もう、栞も二年生の半ばに突入するんだな。来年になったら受験で遊ぶ暇なんてなくなっちゃうんだから、今のうちにいっぱい遊んどけよ。最近はどうだ？学校は」いやに父の言葉は私の痛いところを突付いてくる。

「うん？別に。至って普通だよ」

「そうかそうか。あの。なんだっけ？同じマンションの二階に住んでる子」

洋子のことだ。この質問は聞けない振りをしてテレビを眺めた。もう、イジメによる自殺のニュースは報道されてはいない、代わりに連続通り魔事件が取り上げられていた。人間の興味なんて右から左へとすぐに流れて行ってしまふものなのだ。だから大丈夫。洋子達の今回のこともすぐに終わって、昔話へと変わっていくのだ。

「んじゃ戸締り頼んだぞ。お父さん会社行ってくるぞ」

「はい。行つてらっしゃい」いつもの血液型占いを見ながら、振り返りもせずと言った。

「遅刻しないようにな」と言つて、居間のドアを閉めた。

今日のO型は一位。ハッピーな一日。今まで溜め込んでいた問題が一気に解決！ラッキーカラーは赤。こんな感じだったので、洋子との和解に希望が持てた。

時計は八時を指そうとしている。いつもなら、八時二十分頃までのんびりしているのだが、今日はそうも行かない。洗面所に行つて歯を磨き、手早く登校の準備をして家を出る。

いつものように階段を降りて一階に行き、階段に座り込んで待つ。ポケットから携帯を取り出して時間を確認すると、まだ八時七分だった。これからチャイムが鳴るまでここで洋子待ちだ。

最初は携帯のメールで謝ろうかと思ったが、なんだか気持ちの入ってない気がして却下にした。結局、何時間も熟考した結果、一番初めに浮かんだ直接謝るという案にした。この階段はいつもの洋子の通学ルートだから、朝早くからいれば確実に会うことができる・はず。

八時十五分になった。さっきから階段を使う人に訝しい視線を投げられながらもじくり待っている。いつもならそろそろ来る時間だ。

しかし、二十五分になっても来なかったので腰を上げて登校することにした。きつと、エレベーターで行ったのだろう。こういうすれ違いを予想して最初は却下したのだ。

いつも通り校門をくぐった辺りでチャイムが鳴ったが今日は走る気にはなれなかった。

チャイムが鳴ってから五分以上遅れて教室に着いたときには担任の前島はもういなかった。今日の私は遅刻だろうか？

前島の第一信条はテキトウなのだ。「適」度に「当」たる適当ではなく、テキトウなのだ。適当よりもさらに腑抜けたかんじ。なので、遅刻も付けるのもテキトウ。

「あら。今日はやたらのおんびりだね」と、志保が話しかけてきた。「今日はなんか走る気分じゃなかったから」カバンを机に置きながらため息混じりに言った。

「なんか、元気ないね」

「そう？ チョーあるつもりなんだけど。今日、O型一位だったし」

「あー、あの朝の血液型占いか。栞も良く見るね」

「志保は全くそういうの信じないの」

「全然！ 信じない」と、きっぱり切り捨てられた。

「でも、気持ちが変わってくるよ自分の運勢の批評が良いと」

「まーそうだけどさー。それに・・・」

そのとき、チャイムが鳴って数学の先生が教室に入ってきた。と同時に学級委員の子が「起立」と号令をかけた。

「O型の人間なんていっぱいいるんだよ」それだけ言っただけで顔を向いてしまった。

私の頭の上には？マークが浮かんだ。いっぱいいるからなんだ、という肝心な説明が抜けた言葉を理解できなかった。

授業中に洋子にメールを送った。「話したい事があるから、次の休み時間女子トイレ来て」こんな感じの文面だ。

チャイムが鳴り、起立、礼をして授業が終わる。直ぐに立ち上がってトイレに向かう。

女子トイレのドアを開けると、誰もいなかった。洋子が来るまで鏡で髪をとかして暇を潰した。

髪をとかして暇を潰すのにも限界が来た頃「キィ」と、女子トイレのドアは小さく唸った。

「話ってなに？」本当にめんどくさそうにした顔で洋子が入ってきた。

来ないんじゃないかと思っていたので、来てくれたことに少し安堵した。

「手紙見たけど。どういうこと？」

「は？何の話」洋子は鼻で笑いながらそう言い放った。

ポケットの中から「これ」と言っただけで手紙を取り出した。

「知らないから。そんな手紙」眉間に皺を寄せて睨む。

「この字の感じと。この、ペンの色。こないだ一緒に文具屋で買った珍しい色のペンじゃん」そう言っただけで洋子は開き直ったのか「そういうことだけど？ちゃんと文字読めてる？」と言った。

「わかってるよ！」ついつい声を張ってしまった「多分、弓子がなんか言っただけじゃないの」

「なにを？」怪訝そうな顔で聞いてきた。

「なにをつて・・・」一瞬戸惑ったが「この手紙に書いてあるじゃん」他人の秘密を軽々しく話す。というところを指差して訴えた。

「は？別に、それはなんとなくそれっぽい文章いれたただけなんだけど。」洋子の顔色が戸惑いの方向に少し変化した「っーか、あのお喋りになんか話したの」

「え？」胸の穴がまたひよつこりと顔を現した。

「ミカとかも前からあんたのこと気に入ってなかったからはいちゃおって話になって、それで適当な理由つけた手紙いれただけなんだけど。実際に私のなんか秘密喋ったの？あんた」一歩、洋子は私との間合いを詰めてきた。

私は戸惑いと焦りの中で言葉にならない言葉をボソボソと呟いた。「は？何言ってるか聞こえないから」完全に洋子を怒らせてしまった。だからといって私には何もできず、ただ戸惑いの中で視線を右に左に動かしていた。そのとき、洋子の顔に何かが浮かんだらしい顔になった。

「もしかしてあんた、アノこと喋ったの」顔から怒りの表情がスルリと落ちた。

洋子の言った「アノこと」と私が話してしまった「アノこと」はきつと一緒になんだろうかんじたとき、我慢していたもの頬を伝って流れた。それを見た洋子は、自分が言った「アノこと」が私が弓子に話してしまった「アノこと」なのだと判断したらしく、洋子の目からは怒りも憎しみ消え、温度のない視線がわたしには注がれていた。

一瞬のことだった。頬が熱くなり、次の瞬間には痛みが変わった。直ぐに、洋子が私にビンタをしたんだと分かった。

「ほんとに死ねば」そう言っただけで洋子はトイレから出て行った。チャイムの音が聞こえた。でも私は左の頬に手を当てて泣いていた。泣きながら、今日の血液型占いの結果が頭に浮かんだ。志保が言っていたことが今ならなんとなく理解ができた。

「キィ」とドアが唸ったので顔を上げると、そこには猪俣響子
いた。

イジメ開始（上）

「何してんの？」相も変わらない愛想のない質問だった。

「別に」

「今野さんと喧嘩したんでしょ。なんか今野さん教室戻ってきたとき怒ってる感じだったもん」

「……まあ、そんなとこ」今野さんとは、洋子の上の名前だ。
「もうチャイム鳴ってるよ」素っ気無く言いながら個室に入ってしまった。

涙を拭いて顔を水で洗い、トイレから出て行った。でも授業を受ける気にはなれなかったので保健室に向かった。

保健室には当然ながら先生がいた。机に向かつて何か書き物をしている。私は保健室に入り、ものすごく痛そうな顔で先生に「整理解痛がひどいんで休んで良いですか」と言った。

「あらほんと？とりあえずそこ座って」そう言って、書き途中のペンを置いて立ち上がった。

手に錠剤を二つとコップを持って私の前に来た。

「これ飲んで、一時間休んでだめそうだったら、早退する？」

「や、とりあえず休んで、平気そうだったら教室戻ります」

「そうね。とりあえず、ベットに横になってなさい」そう言って書き物の続きをやりだした。

私は手渡された錠剤を水で流し込んでコップを流しに戻してベットに向かった。ベットが硬いのを除けば最高の空間だ。

ベッドの中に入ったら急に泣きたい気持ちになった。不甲斐無さ？この先の不安？色々なものが大きく見えて、それをひとくくりにした良い説明が思い浮かばないが、無性に悲しくなった。けれど、涙は堪えてとりあえず寝よう。それが結論だった。

別にすごく眠かったわけではないが、上下のまぶたをくつつけたら直ぐに優しく何かが私の手を引っ張って、静かな真っ白な心地良

い空間にストンと落としてくれた。

そして、次の瞬間にはもう保健の先生が私を揺り起こしていた。

「どう？授業出れそう」

「や・・・ちよつと、今日はダメそうですね・・・」本当に痛そうな感じに顔を歪ませて言った。もちろん嘘だ。

「そう。じゃあ、今日はもう帰る？三時間目だけど」

「はい。そうします」あくまでつらそうな顔で。

「じゃあ、早退届け書いておくから上行って荷物とって来なさい」

「はい」そう言ってベッドから這い出た。

階段を三階まで上って、A組の教室に入る。

「あれ？栞どこ行ってたの」

まだ、黒板の板書を書き写していた志保がきよとした顔で聞いてきた。

「保健室。今日はもう帰るのさ」

「え！なんで!？」

「なんか今日、学校だるい」机の中から教科書を出しながら言った。

「あのひと、どんな理由でもすぐ帰してくれるよね。真面目に仕事やる気あるのかね？」

「そう？私的には直ぐ早退させてくれる先生なんて最高だと思うけど」

志保みたいな真面目学生にはこの素晴らしさは分からないのだ。

「じゃ。また明日ね」

「うん。じゃーね」

荷物を詰め込んだカバンを持って再び一階の保健室に戻り、早退届けの紙をもらって、担任の前島に出しに行く。

「失礼します」

教員室の立て付けの悪い扉を開けた真正面の席が前島も席だ。

「お、真鍋どうした」

「早退するんで、この紙」

早退手当てを前島に手渡す。

「おう、わかった。気を付けて帰れ」

「はい。失礼します」

再び、立て付けの悪い扉をゴロゴロと閉める。

下駄箱に行き靴を取り替え、外に出る。午前中だけあって日差しが心地良い。

ふとグラウンドを覗いてみると組が体育をしていた。思わず洋子を探してしまう、今日は五十メートルのタイムを計る日だ。ざっと探した感じ居なかったので恐らく、洋子は走るのが苦手だからきつと適当な理由で見学しているのだろう。

目線を前に向けて校門を目指す。と、校門の近くで二人の女子が居るのを見つけた。

歩を進めることに不安は大きくなり、まさか・・・という不明確な憶測はしつかりとした形へと変わって行つた。洋子とミカの顔がはつきりと認識できる距離まで来ると目頭が熱くなってきた。

「さばかりかよ」

とんがった言葉を先に投げてきたのはミカだった。

「それとも」

洋子が声を発する。胸がキュッと締め付けられる。

「自分がどれだけ不要な人間か気が付いちゃった」

ミカよりも尖っていて、刺々しい言葉を洋子はぶつけてきた。

あくまで平静を保って何もなかったように洋子たちの前を通り抜け、校門を抜けた。我が家がもう直ぐそこなのが嬉しくて仕方がなかった。気を抜くとまた目から涙が溢れてしまいそうだった。

いつものように階段を上がり、家の鍵を開けて家に入る。「ただいま」と呟く。

そうした瞬間に堪えていたものが目から溢れ出来た。玄関にしゃがみ込んで泣いた。

どれだけ時間が経つただろう、携帯電話のバイブレーションが鳴ったので顔を上げた。きっと現実の世界では五分程度なのだろう

が、私の中では十五分にも三十分にも感じられた。

ポケットの中から携帯電話を取り出しディスプレイを見ると、洋子からのメールだった。少し固まって考えたが、大体の内容の見当がついたので見るのを止めた。

靴を脱ぎ自分の部屋に入る。妙な懐かしさと安堵感が私の胸の穴を吹き抜けていく。

カバンとブレザーの上着を適当なところに置いてベットのの上に横になる。

さっきの洋子の言葉を噛み締める。頭の中では根を下ろしたはずの「なぜ？」が再び舞い上がり「どうしよう」という戸惑いと共に脳内を駆け巡っている。考えれば考えるほど悪い方向に進んで行き、また涙が溢れてきた。「死」について考えた時の気持ちにちょっぴり似ている。考えれば考える程わけが分からなくなってきた、いたずらに恐怖という実態のない存在がどんどん肥大していく。

知らない間に眠ってしまった。

時計に目をやると時間は二時を少し過ぎたところだった。

ブレザーの中で携帯電話わやかましく音を立てていた。ベットから降りてカバンの側にあるブレザーの中から携帯電話を取り出す。

着信履歴三件。Eメール件数三十二件。

胸の穴を風が寒々しくすり抜ける。しっかり携帯電話を握り締めていないと落としてしまいそうだった。

念のため送信者をチェックするとほとんどが当然ながらミカと洋子だった。その中にポツンと志保からのメールが二件来ていた。

「しね」

「早く成仏してください（<―>）」

当たり所が悪く床に落ちた携帯電話から電池パックが弾け飛ぶ。

よろよろとベッドの縁に座りこんなに私って涙腺弱かったつけ？

志保は洋子のこと嫌いなはずなのになんで？と疑問ばかりが頭の中で渦を巻いていた。

いじめ開始（下）（前書き）

感想募集中b（^、）

いじめ開始（下）

暗闇の中を目線が彷徨う。昼間あれだけ寝たのだから当然ながら布団に入ったところで直ぐには眠れない。さつきから何回も寝返りを打っている。

気が付いたら父が帰ってきていた。それからいつも通りに時間がしつかりと流れていった。

いつも通り夕飯を食べてお風呂に入り、学校で流行のお笑い番組とドラマを観て、父に

「宿題は終わったのか？」

と聞かれて

「うん」

といつも通りに気の抜けた返事をして、十二時にベッドに入って今に至る。

眠るのをあきらめて起き上がり、小窓のカーテンを開ける。

空には程よい光で満月が輝いている。太陽と似てくるくせに太陽と違ってしつかりと直視することができる。

このまま朝が来なければ良いのに・・・そんなことを一人の人間が望んでも一億人の人間が望んでも冷たくも朝は訪れる。

カーテンを閉めて再びベットに潜る。頭の中から志保のことが離れない。

なぜ？ どうして？ どんなに疑問をぶつけたところで空想の中の志保はなにも言わない。

カーテンの隙間から朝日が射す。壁に掛かっている時計に目をやる、時間は七時十五分。

結局寝たのは三時頃だったのだがきつかりとこの時間に起きてしまった。

いつも通りにカーテンを開け伸びを一つするが気だるさは抜けない。睡眠時間が少ないからではなく、きつと精神的な部分から来て

るのだらうと思う。 だるい体をいやいやながら持ち上げて居間に行くといつも通り父が朝ご飯の準備をしていた。

「おはよ」

いつもより更に低いトーンで言う。

「おう。 おはよう」

いつも通りの朝の光景。 でも、それも今のうち。 一時間後には昨日とはなにもかもが違う今日が流れた。

「今日はちゃんと半熟と固焼きは間違えてないぞ」

そう言っつていつも通りのソーセージと目玉焼きが乗った皿を差し出した。「つか、間違えることが信じられないから」

そう言いながら橋を黄身に刺すと中から黄色い液体が流れ出て来た。「わざとやってるの?」

「んじゃ、お父さん会社行くから戸締まりとか頼んだぞ」

「はい」

いつもの様に血液型占いをみながら気のない返事を返す。

もうこんな占いなんか信じる気はないが、形だけ見ておく。

「あ、それと」

ケツポケットから財布を出して、そこから2000円程出して

「今日帰り遅くなりそうだから適当に食べておいてくれ」

そう言っつて食卓の上にお金を置いた。

「じゃ、行つてきまーす」

「行つてらっしゃい」

今日のO型はビルだった。

時計は八時を指している。 学校に行くのが非常にだるい。 まだパジャマを着たままだらけているのが何よりの証拠がある。

「ヒキコモリ」

そんな言葉が頭の中を右から左に流れ、胸に空いた穴を風がすり抜ける。

気が付けば立ち上がっていた。ひきこもりなんて絶対かんべんだ。

ほかの学校はどんなのだから知らないが、私的にはうち学校は登校拒否児が多いと思う、うちの学年はひとクラスに二人程はいる。

うちの学年は五クラスあるから、十人程度だ。理由はいじめが主だが、一年生の初めに少し来て来なくなった生徒もいる。恐らく小学校の時から不登校気味だったのだろう。はつきり言って、私はその生徒達を嘲笑していた。

ひきこもったらいじめっ子に負けを認めたことになるし、親や親類にいじめられていたことを知られて恥ずかしいのか？

そういうことを考えると絶対にひきこもりに、登校拒否児にはなりたくない。

結局家を出たのは八時二十分だった。丁度マンションを出た辺りで学校から予鈴の音が聞こえる時間だ。

いつも通りに階段を使って一階まで行って、オートロック式の扉からでる。

予想通りマンションを出た辺りで予鈴が聞こえたが今日は走る気にはとてもなれなかった。

ゆっくりと歩いて二年生の昇降口に向かう。

下駄箱に近くなる程 不安が大きくなる。もしや、上履きが無いかも…という不安があった。

が、下駄箱の前まできたら不安は飛んで行った。

上履きはいつもと同じ形でいつも通りにあった。念の為、上履きを逆さまにして画鋲が入っていないか確かめた。

さすがにそんなちなけな仕掛けはないか、と思わず鼻で笑ってしまった。

右足から靴を脱いで上履きを履き、続いて左足を上履きに突っ込む。

その瞬間体に電気が走った。

「っ……」

つと、言葉にならない低い呻き声をあげてすぐに左足を抜いた。

白い靴下の親指の部分がたちまち血で赤く染まる。

ぶつきらばうに上履きを拾いあげる。上履きのつまさきの部分に待針が刺してあった。

痛いからではなく無性に泣きたくなった。

いじめ開始（下）（後書き）

どよ？これ？感想 評価募集中b（^、）

幽霊と私（上）

階段に座って靴下を脱ぎ、生徒手帳の中に入れて置いたバンドエイドを取り出して足の親指の先に貼る。あまり深くは刺さっていなかった様で、血は大体治まって来ていた。

親指の部分だけ赤く染まった靴下を再び履き直し、なんの細工もかかっていない上履きを履いて階段を登り始めた。

教室に着いた時には一時間目の数学の授業が始まっていた。

「真鍋。遅いぞ」

と言われたが軽く会釈だけした。

遅れて教室に入って来た私を見るみんなの目がやたらに突き刺さる。昨日、一昨日までは極普通に感じていたみんなの視線が痛い。

席に向かつて行く途中志保と目が合ったがすぐに外されてしまった。

席に着いて鞆を置き、机の中から教科書ノートを出そうと思って手を入れると予想通りの物が沢山入っていた。そのなかの一枚を取り出し広げて見る。

「死ね」

太いマジックでしつかりと書かれている。

その紙を机の中に戻して他の紙と一緒に机の奥に押し込む。と、その時に机の中に入っていた教科書ノートが全部ないことに気が付いた。持って帰ったのかと思って鞆の中も調べてみたがない。犯人は洋子だ。

とりあえず代用のノートを出して板書を書き写し、極力問題を当てられない様に、授業の大半は机に突っ伏して過ごした。

数学の授業も無事終わり、休み時間になると、小野幸子が私の席に来た。

小野幸子、雨宮縁、中西美郷はこの学校にも必ずいる漫画やアニメ好きの、言わばオタクの地味なグループである。

幸子とは小学校の六年間同じクラスであつたが、全く関わり合いはなかつた。

「何？」

こつちに向かつて来る幸子に対して先に口を開いたのは私だつた。

「洋子の話」

「え？」

幸子の口から洋子の名前がでてきたことに驚いた。

「栞、洋子と喧嘩してるね？って言うか…」

その先を気まずそうに濁したので

「はぶかれてるよ」

とそつけなく言つたやつた。

「やつぱり」

少し気まずそうな顔をした

「昨日から結構洋子とミカが女子に声掛けてるんだよね。昨日途中で栞帰つたから知らないと思うけど」

胸にぽっかりと空いた穴を風が吹き抜ける。驚きに顔を歪めたくなつたが、幸子にはなぜだか弱いところを見せなくなつたので頑張つて平静を保つた。

「関係ないよ」 あくまで平静に、幸子とは目線を合わせずに遠くを見つめる目で言つた。

「え？」

「別に洋子達にはぶかれたつて関係ないよ」

「でも、きつとみんな洋子について、栞みんなにはぶかれることになるんだよ？」

「この話に…」

遠くを見ていた目線を幸子の目線に合わせる

「幸子はもつと関係ないよ」

幸子はきよとした顔をした。はつきり言って、ありがた迷惑なのだ。はぶかれたからつてこんなグループに入るのは御免だ。

「幸子も私なんかと仲良くしてると洋子達にシメられるよ」

顔に愛想笑いを貼り付けて言った。

「辛くなったらいつでも私達のグループおいでね」

困った様な顔をして幸子が言ったが、微笑むだけで何とも言わなかった。

今日はその会話意外に誰とも喋らなかった。給食の時間も黙々と食事をして、昼休みは寝て過ごした。

洋子には一度も今日は会わなかった。だから、いじめらしいじめは基本的には今朝のあれだけかと思っていたが、帰りに大きいのをひとつやられた。

靴がない。

両方ではない。片方だけがなくなっていた。

その残った一足を手に取って走った。家まで数メートルの距離を全速力で走り抜けながら、自分の物は肌から放してはいけないということを脳裏にしっかりと烙印した。

マンションのオートロックドアを開けて、階段を一段飛ばしで登り、家の鍵を素早く開けて、何かから逃げる様に家の中に滑り込んだ。

上履きも脱がず、ただいま言わないで部屋に入り、肩で息を切りながらベッドの縁に座った。

何を見るでもなくぼーっした。もう、泣くのも現実逃避の様に寝るのも嫌だった。

そう思う私自身の理性とは反対に感情は素直で、気が付けば頬を一筋の液体が伝う。そのまま横になって、暗い沼地に足を沈めた。目覚めて時計をみると五時前だった。

重い体を起こして立ち上がり、家を出ようとした時にまだ上履きを履いていたことに気が付いた。そして運動靴がないことにも。

靴棚を開けて代用の靴を探したが、面倒だったので上履きのまま飛び出して。

いつもの様に階段を登って、16階を目指す。

いつも通り八階から壁の色が変わり、あと半分で最上階ということとをさり気なく私に教えてくれる。

十六階に着き、息を切らしながらいつも通りフェンスを乗り越える。私だけの安息の地が私を優しく包み込む。

今日は快晴だったのも相成って、夕焼けがはっきりと真つ赤に自分の存在を主張していた。

ポケットから携帯電話を取り出してカメラモードに切り換えて、肩程の高さのフェンスから背伸びをしてなんとか携帯電話をフェンスの向こう側に出して、構える。

と、その時、携帯が鳴った。無理な体勢で構えていたこともあり、携帯が手から滑り落ちた。

幽霊と私（下）

手から離れた携帯電話は微弱に風に流されながら下へ下へと落ちて行き、八階の庭園に落ちたようだった。

恐らく壊れてしまっただろうが、大して悲しくはなかった。むしろこれ以上メールや電話が来ないことに安堵感さえ感じた。

でも一応確認しに行こうと思った時、あの日と同じ様に人がスツと通った。顔から血の気がすーっと引いて行くのを感じた。

来たときと同じようにフェンスを越えてエレベーターホールへと行き、下ボタンを押してエレベーターが来るのを待つ。幾分早く来たエレベーターに乗り込んで「八」のボタンを押した。この間と同じく八階が近づくにつれて鼓動が微妙に早くなる。チン。という音と共にエレベーターの扉がゆっくりと開いた。

八階の庭園に行くと、ベンチに人が座って本を読んでいた。八階の庭園には来たことが無いのだが、十六階の庭園と大して代わり映えは無かった。庭園の入り口のドアを見ると、南京錠が外されていた。

扉を引くとキイと鈍い音を立てた。その音に反応して本を読んでいた人が、本から顔を上げ、こちらを見て来た。なんだか見覚えのある顔だった。

「なんか用？」

尖った声で誰なのがわかった。猪俣響子だ。

「上から携帯電話落としちゃってさ。猪俣さん何してんのここで？ てか、なんで鍵あいてるの？」

「何してるかは見れば分かるでしょ」と言っつて、本をヒラヒラと振った。「鍵が開いていることは秘密。たぶん携帯は壊れてるよ、あつちにあるけどね」と、芝生の方を指差した。

指差された方の芝生に向かって歩く。携帯はあったが、当たり所が悪かったらしく見事に真っ二つに割れていた。その側に花束が置

かれていることが気になった。

「何この花束」猪俣響子に聞いてみる。

「事故で死んじゃった子の花束」再び本に目を落とした猪俣響子が素っ気無く答えた。

「あ、そうなんだ。なんか、まずいこと聞いた感じだね」

「私んちの子供じゃないし別に。それに・・・」そこまで言っ言葉葉を切った。

私はフェンス越しに、いつもとはちよっぴり低い位置から赤く染まる町並みを眺めた。観てるものは一緒なのになにか違う感じで、私にちよっぴり似ていると思った。

「猪俣さんはいつつも何読んでるの？」

「いつつもって・・・その時によって読む本なんて違うに決まってるじゃん」

「大体だよ、大体。中心てきな主類とかあるじゃん」

「哲学」一言だけでいつにも増した素っ気無く返してきた。

「へー。よく読めるねそんなの」

「別に。なんとなく部分が多いけど、言いたい事は大体分かるよ」「隣座って良い？」

「勝手にすれば」

「んじゃ、お言葉に甘えて」人一つ分のスペースを開けてベンチに座り「ちなみに、何読んでるの？」と本を覗きながら尋ねた。

「多分言っても知らないよ」

「私だって少しは知ってるよ。ニーチェとか」

「ショーペンハウアー」本から顔を上げて言った「知らないでしょ」「誰？」

「ショーペンハウアー『存在と苦悩』。生きることを苦とする哲学者で、ニーチェの考えとはほぼ真逆な考え方」

「へー。面白いの」

「分かればね。私はこの人の考えが好きだから、この本はもう四回目」

「ふーん。私にも読ませてよ」

「は？」紫縁の眼鏡の奥で眉毛を寄せた。

「だから。私も読みたい」

「ほんとに読むなら好きにすれば」と言って、本を閉じ私に差し出した。

「え？」

「読むんでしょ？」突然目の前に出されて戸惑っている私に言った。
「うん。読むけど・・・途中じゃないの？」

「もう三回も読んでるから別に。どうせ途中で諦めるだろうし」
最後の一言に少々ムツとしながら受け取り「ありがとう」と言っておいた。

「私帰るけど、真鍋さんどうする？」

「あ。じゃあ、私も行く」

一緒に扉から出た。猪俣響子はポケットの中から南京錠を取り出してしっかりと施錠した。

「じゃ。私階段で帰るから」と言って階段のところで別れた。

「じゃあね」と言って、私はエレベーターホールに向かう私の背中に「あ。あと、」と猪俣響子が言葉を投げてきたので振り返った。

「オーストリアかスイスって感じだね」それだけ言うと猪俣響子は階段を上りだした。

言われた意味が分からない私の頭の上にはクエスチョンマークが沢山浮かんでいた。なんで、南京錠の鍵を持ってるかなど、猪俣響子に対しては疑問ばかりが浮かんだ。

今思ってみたら、今日まともに会話したのはこれが初めてだった。

永世中立国家と私（上）

雨音が部屋にこだまする。

この三日間雨は飽きることなく私の町を濡らし続けている。梅雨の季節になってもイジメは続いた。イジメと言っても基本的には「はぶ」にされているだけなので慣れたくは無いが、大分慣れた。お父さんは相変わらずこういうことには鈍く、なにも気づいていない。携帯電話は解約してしまつて結局新しいものは買っていない。もうすぐ受験だから。と適当な理由をつけて買ってもらわなかった。猪俣響子とはあの日以来話していない。借りた本はあと数ページで読み終わるのだが、ちんぷんかんぷんだ。読んでは戻つて、戻つては読んでを繰り返している。でも好きな文章は見つけられた。

「われわれは、物を食べたり、眠ったり、暖をとつたりしては死と格闘するのだ。結局勝つのは死である。なぜなら、われわれは既に生誕とともに死の所有物となつたからである」

当たり前のことが書いてあるだけに胸にぐつとくる。こんなことを意識して生きていないから突然目の前に最終的な終着点を押し付けられて、妙に世界が狭まつた感覚に陥る。

雨の日は本を読んで、晴れの日には本を買いに行く。

この数ヶ月で格段に私の読書量は増えた。薄っぺらな文庫本なら一日であっさりと読んでしまふ。昔の私なら一週間かかって読み終えることはできなかっただろう。

学校でも放課後でも話し相手が居ない私は文字で胸に空いた隙間と時間を埋める。猪俣響子がずっと本ばかりを読み続けて居る意味が分かった。

洋子とミカは完璧な問題児になつた、学校には週に二回位しか来なくなつた。

だから周りの女子は私を

「はぶく」

ことを止められないのだ。話したら今度は私が・・・みたいに思ってるのだろう。

ベットに寝転んで本を読む。あと数ページで読み終わる。全部読み終えて猪俣響子に返したら彼女はどんな顔をするだろうか、少し考えたが多分いつも通りの無愛想な感じだろうと思う。

そんなことを考えていたらまた話の筋がわからなくなった。

最後のページをめくる。小説とは違いなんのオチもないためか、なんとなくあっけない終わり方に感じた。それと同時に妙な解放感を得た。

「やっぱり私に哲学なんて向かないなあ」

と、わざと声に出して言う。私なんかには哲学よりも、直木賞とかを取ってるミスターな感じが似合うだろう。

本を閉じて勉強机に置く。窓を開けて外を見ると雨は上がっていたが、まだ空には重たい雲が掛かっている。

ぼんやりと猪俣響子のことを考えた。今日も八階の庭園にいるのだろうか？猪俣響子と無性に話したい。久しぶりに友達と話したいとかじゃなくて猪俣響子と話したい。同じ

「いじめ」

という痛みを感じたことのある猪俣響子と……

気が付くと窓を閉めて立ち上がっていた。それから、適当なトートバッグに本を入れて家をでた。壁の色が変わる境目でストップ。八階の庭園に行ってみたが当然ながらという感じで猪俣響子は居なかった。

少しの間、しっかりと施錠された南京錠をぼんやりと眺めた。さすがに雨が上がったばかりではいなくて当然だ。そう思ってその場を後にしてエレベーターホールに向かう。

下のボタンを押してエレベーターが降りてくるのを待った。一端つこのエレベーターが十階から降りてくるので、そのエレベーターの前に移動する。

九：八：と降りてきたエレベーターの中には見慣れた人間が乗っていた。

「あら。真鍋さん。何やってんの」

別に興味はないが形として聞いている感じで言われた。

「や、庭園行ったら猪俣さんいるかなって」

なんだか妙に恥ずかしくて言葉のお尻のほうは縮こまってしまった

「ふーん。なんか用？」相変わらず無愛想に尋ねてきたが「まあ、いいや。これから行くところだからくれれば？」と言った。

「あ。うん」という私の返事もろくに聞かないで猪俣響子は歩き出した。

手馴れた手つきで南京錠に鍵を挿して開錠する。こないだの時と同じようにキイト、扉が小さく呻いた。二人でベンチの前まで歩いたが、当然のことながらベンチは濡れていた。

「ふう。で、なに」

全くベンチが濡れていることなんか気にせず猪俣響子はベンチにもたれかかった。

「あ。本読み終わったから返そうと思って」

私も、お尻が濡れるのを気にしながらもベンチに座った。

「え。ほんとに。やるじゃん」

想像していた事とは違い、やわらかい笑顔で猪俣響子は私を褒めてくれた。

「でも、なんだかあんまり理解できなかったよ」

猪俣響子に褒められて、なんだか少し恥ずかしくて目を見て話せなかった。

「ふっ。そんなもんでしょ」

と、鼻で笑われた。

そこからは取り留めの無い話を延々と私が一方的に話した。猪

俣響子は、持って来た本に目を落として、私の言葉に、うんうん、と相槌を煩わしそうに、でも優しく打っていた。

話しのネタが尽きて、妙な沈黙が私たちの前に降りて来た。

「ねえ」

と、先に口を開いたのは私だった。

「こないだ言ってたスイスだかなんとかってどういうこと？」

本から顔をあげて、しっかり私の目を見据えて短く一言

「永世中立国家」

と言った。

永世中立国家と私（下）

「えいせいちゅうりつこっか？」

猪俣響子が口にした言葉と同じように言っただけだった。だが、なんだか間の抜けた感じになってしまった。

「知らない？」

と訊かれたので首を横に振った。

続けて

「知りたい？」

と訊かれたので今度は首を縦に振った。

ふう。という感じで本を閉じて話し出した。

「永世中立国家っていうのは、もし多国間で戦争が起こっても中立の立場である事を宣言して、他国がその中立を保障・承認している国のこと。軍事的な同盟国がないから、他国の軍事攻撃に遭った時でも自国のみで解決しなければいけない。そういう側面もあるから強力な軍隊を組織している国が多いらしいよ」と、一息に言い切った。

「つまりどういうこと？」

猪俣響子は柔らかく説明したのだろうが核心的な部分が避けて話されていると私は感じた。

「スイスとかオーストリアとかがそれを宣言してるの」少しムツとした感じの目だった。

「つまり私が猪俣さんの目にはその中立国家みたいに映ってるってことなの？」

「まあ。そういうこと」

私の目から視線をはずして遠くを見ながら一言

「いじめられてるんでしょ」

と加えた。

胸の中が妙にざわついた。他人にしっかりと澱みなく言われたの

は初めてだった。

「今までは広く浅くみたいなかんじで中立の立場で接してたけど、いざ『いじめ』っていう名の他国からの攻撃を受けると誰からの援助もなく自国だけで解決しなければならぬ。そんな感じでしょ」

再び私と目を合わせた。すごく冷たく挑戦的な目をしていた。

「じゃあ」と、声を発したつもりだったがうまく出なかった。咳払いをひとつとして仕切りなおす。

「じゃあ。猪俣さんはどうだったの？」逆に挑戦的な視線を投げかける

「なにが？」眉間に皺を寄せた。

「昔」声が澀む「猪俣さんもしじめられてたんじゃないの？」

口に出したら妙に胸がすっきりした。猪俣響子の顔が歪む。

妙な沈黙が再び二人の間に割って入ってきた。一分だろうか？

十分だろうか？ 一時間だろうか？ 嫌な時間がゆっくりとスライドして行く。

「なにそれ」遠くを見ながら短く猪俣響子が言った。

「なにそれって？」

「私がいじめられてたって話。別に好きで一人やってるつもりなんだけど」と早口にまくし立てた。

「今の学校じゃなくて、前の学校の話なんだけど」と少し気負いを感じながら何とか発した。

「前の学校でもいじめられてないし。変な噂流さないでくれる」

そう言って立ち上がって南京錠を私に放る。

「私先に帰るからちゃんと閉めて行ってね」と言っただけでさっと歩いていった。

「何？逃げるわけ？」

扉を開けて出て行く猪俣響子の背中に言葉を投げた。しかし、振り返りもせずに行ってしまった。

本を返し忘れたのを思い出した。

猪俣響子が出て行ってから少ししてから私も出て家に帰った。お父さんと一緒にごはんを食べて、お風呂に入って、お笑い番組をみて布団にはいった時に自分の言ったことを悔やんだ。

「変な噂」最後に言った猪俣響子の言葉がリフレインする。確かに変な噂だ。明確な根拠もない。誰かが流して、気がついたら風化して影も形もなくなったものを私が勝手に蒸し返したただけだ。

寝返りを打つ。明日も時間通りには起きれないだろう。みんなに無視される孤独感から引き起こるストレスで体のバイオリズムは少しずつ崩れはじめている。前髪を下ろしているからあまり目立たないが、おでこにニキビが二三個できてしまった。

羊を数える。一匹・・・二匹・・・頭の中でもこの羊が柵を飛び越えてフェードインしてそのまま左にフェードアウトしていく。昨日は112匹数えたところでやっと眠りに落ちることができた。今日は何匹で眠りに落ちることができだろうか。

柵を羊が越えて視界に入り消えるとまた同じ要領で羊が通り過ぎて、しばらくして羊が歪んで瞼の裏の暗闇に溶け込んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4222a/>

中立国家の私

2010年12月14日17時13分発行